様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 12 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０００７
研究課題名（和文）　存在論をてがかりとした道元の思想構造に関する総合的研究

研究課題名（英文）　A Study of the Structure of Dogen’s Thought from the viewpoint of Ontology

研究代表者
頼住　光子（YORIZUMI Mitsuko）
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：９０２１２３１５

研究成果の概要：本研究は、日本の思想書の中でも難解をもって知られている『正法眼蔵』の正確な読解を基盤として、道元の思想の全体像を解明しようとするものである。その際、道元の思想の根幹にある存在論を、自己概念や、世界観と関連させて明らかにすることによって、道元の思想の構造を総体として提示した。特に、大乗仏教で重視された「仏性」を手掛かりとして解明を行った。その際、道元の存在、自己、世界に対する把握の基底をなす「空―縁起」に着目し、それを表現する文体に焦点をあてて検討した。

さらに、道元の存在把握から、存在の理法としてどのような当為、すなわち倫理が導き出されるかについても検討課題とした。特に「善悪」「因果」をめぐる道元の独自の思想を『正法眼蔵』の記述を手掛かりとして明らかにした。

また、道元の存在論の日本倫理思想史上、東アジア仏教思想史上での独自性はどこにあるのかという問題についても解明をはかった。その際、前述の「仏性」を手掛かりとして考えた。そして、道元の仏性理解が、インドから東アジアへと展開する仏性観のある傾向性に対するアンティテーゼでもあることを解明し得た。道元の仏性観に対するこのような観点からの研究は従来行われておらず、宗学を離れたより広い視野からの道元研究という点で意義があるものと思われる。

比較思想的な解明としては、道元と親鸞との比較研究を、「悪」の理解、「仏性」観という観点から行った。その結果、道元と親鸞の「悪」に対する考え方も、「仏性」に対する考え方も、それぞれ思想的背景は異にしつつ大枠においては同じ方向をめざしており、また、それぞれが仮想敵とした相手が、仏教思想がややもすると陥りがちな実体化傾向であったことを指摘した。これらを通じて、親鸞と道元との共通性を明らかにし、それが大乗仏教思想の透徹した理解に基づくことを示した。親鸞と道元の大乗思想家という観点からの比較、また、仏教思想史上の位置づけという観点からの比較はこれまでほとんど行われておらず、その意味で、本研究は、日本の仏教思想の意義を解明する上で一定の貢献をなしたといえよう。

また、道元の「悪」についての研究に関連して、日常的世界における「悪」と宗教的世界における「悪」との関係について検討した。さらに、検討の前提として、道徳と宗教との関連について、日本思想史に即して解明をはかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	540,000	3,340,000

研究分野：日本倫理思想史
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：道元・親鸞・『正法眼蔵』・『教行信証』・仏性・悪・存在論

１．研究開始当初の背景

日本倫理思想史の研究において、仏教思想の研究は不可欠なものであるが、従来、仏教思想の研究は、宗門を中心とした護教的、自宗教中心主義的な立場から行われるか、下部構造とされる経済―政治体制の反映として仏教思想を捉えるか（例えば、鎌倉新仏教偏重を批判して近年提唱され、半ば定説となっている顕密体制論もこのヴァリエーションであろう）であった。それらは、一定の成果を上げたものの、そこには仏教思想をそのものとして捉える視点が欠如しており、おのずから限界があったことは否めない。つまり、欠けているのは、当該の思想を、思想内部の理路をたどりつつ、すなわち、思想内部のコンテキストに沿いつつ、読み解いていく営みなのである。

われわれは、日本倫理思想史の研究者として、これまで思想を思想それ自身として、テキストの忠実かつ精密な読みを通じて明らかにするという方針のもとで、仏教思想、特に難解をもって知られる道元『正法眼蔵』の研究を、厳密な註釈作業に基づき行ってきた。本申請研究の学術的特色と独創的意義は、まさにこの厳密な註釈作業に基づくテキスト内在的な解明という点と、思想を思想内部の論理構造にしたがって体系的、総合的に解明するという点に存する。特に、語義や解釈の確定の際に、『正法眼蔵』その他の著作における道元の用例を徹底的に洗い出し、さらに用語の典拠（多くは中国の禅語録や経典）にまで遡りコンテキストを踏まえた上で分析するするわれわれの手法は、イデオロギー的解釈や宗教的信仰、実感に基づくのではない客観的な解釈方法として特色をもったものである。宗門の伝統的解釈を超えようとする近年の道元研究の中にあって、その基礎的部分を固める註釈を行うとともに、さらに、思想構造を体系的に解明しようとする本申請研究は、一定の貢献を期待できるものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、中世日本の禅者であり、日本思想史の中でもきわめて深い思索を展開したとされる道元の思想構造を、彼の独創的な世界把握を軸として、テキスト内在的に解明することである。道元をはじめとする禅者がめざした悟りとは、内面的かつ直感的なものであり、それ故に多くの禅者にあっては、象徴的にしか表現され得ないものであった。そのような中にあって道元の独自性は、この言語超越的な悟りの体験を、極めて綿密な理路によって言語化しようとした点にある。言語を超越したものを言語化するというアポリアを自己の思想の核心に置いていたが故に、道元の文章表現は難解を免れざるを得ないし、また、独特の文体、論理形式を取らざるを得ない。したがって、道元の思想構造を解明するためには、その難解な言語表現を、整合的かつ論理的に、そして、綿密に解釈することが必要となってくる。そこで本研究においては、道元の主著である『正法眼蔵』に対する詳細な註釈に基づいて、その存在把握を中核として、道元の思想の構造的解明をめざすこととする。具体的には、従来われわれが行ってきた道元の行為理論、そして時間論についての研究を基盤としつつ、道元の思想の根幹にある存在論を、自己観念や、世界観と関連させて明らかにすることによって、道元の思想構造を総体として解明する。特に、道元の、存在、自己、世界に対する把握の基底をなす「空―縁起」について、その文体に着目して検討する。「空―縁起」とは、大乗仏教の基本概念であり、道元の、存在観、自己観、世界観の基礎をなすものであるが、『正法眼蔵』の文体の特異性は、この「空―縁起」そのものを表現しようとしたところに淵源する。「空―縁起」について解説した仏教の経典や論書は多数あるが、「空―縁起」そのものを文章の中で表す、しかも論理的思索に基づいて、超論理的な「空―縁起」世界を表わしたということは、道元のきわめて独創的な点である。

「空―縁起」を表すために、道元は、その著述の中で、逆説、比喩、反語、置き換え、矛盾表現などの技法を駆使する。それは、日常的な同一律、矛盾律に基づく世界（日常世界＝世俗世界）の論理の否定でもある。本研究においては、従来ほとんど行われていなかったに等しい道元の文体の分析を手がかりとして、道元の思想の独創性を解明すること、そして、それを手がかりとして道元の存在論を明らかにすることを目標とする。

さらに、道元の存在把握から、存在の理法としてどのような当為、すなわち倫理が導き出されるのかをもあわせて解明する。「空」なる存在の倫理として、とくに善悪超越という特異な価値論と、修証一等の修行論の問題に光をあて、さらに、日本仏教における日常

的世界、世俗倫理へのアプローチを三類型に分けるという仮説を展開しながら、道元の思想の特徴をあぶりだすことをめざす。

さて、道元の主著『正法眼蔵』の中で、その存在論が集中的に展開されている巻として、「仏性」巻がある。これは、難解をもって知られる『正法眼蔵』の中でも、ひときわ難解な巻ではあるが、思想的に最重要な巻の最右翼でもある。「仏性」巻については、古註（近代以前に宗門で行われた註釈）ならびに新註（近代以降の註釈）が各種行われているが、解釈の確定していない部分が多く、論理的一貫性と『正法眼蔵』の用例に立脚した正確な読みはいまだ行われているとは言いがたい。そこでわれわれは、まず第一に、「仏性」巻に対して、諸写本を校合し、校訂することによって、疑問の多い本文を確定する。さらに、『正法眼蔵』諸巻における用例分析をふまえつつ、論理的一貫性をもった註釈をほどこす。その上で、道元の存在論を扱う『正法眼蔵』の他の巻（「現成公案」「山水経」「空華」「諸悪莫作」）をも参考にしつつ、その存在観を、世界観、言語観、真理観、行為論、時間論、自己観と有機的にリンクさせながら、体系的に解明することをめざす。

そして、その上で、道元の存在論の日本倫理思想史上、東アジア仏教思想史上での独自性を、親鸞等の思想家と比較することを通じて解明する。

３．研究の方法

本研究においては、存在論を軸とした道元の思想構造の文献的解明のために不可欠な、『正法眼蔵』本文の注解を、「仏性」巻を中心としつつ、関連する「現成公案」巻、「山水経」巻、「空華」巻等をもあわせて行う。その際、従来の研究がそうであったように、宗門の通念的な解釈に従うのでも、宗教的信仰や実践的実感に基づく主観的な思い入れによって、また何らかの歴史的通念から演繹して解釈するのでもなくて、あくまでもテキスト内部の論理構造の把握を目指す。

また、註釈については、テキスト本文の確定がまず必要になってくるが、これについても、『正法眼蔵』の成立と受容について、道元教団の成立、展開史とも関連付けて解明し、その上で、諸写本を校合の上、本文を確定する作業が必要となってくる。

そして、この註釈作業を通じて、道元の思想構造を、存在論を軸として総合的に検討し、道元の思想の独自性と意義とを、日本倫理思想史、東アジア仏教思想史の上で明らかにし、さらに、その存在論を西洋哲学における代表的な存在論と比較することによって、宗教的存在論としての特徴を浮き彫りにすることをもめざす。以上を実現するための具体的な方法は以下の通りである。

平成１８年度

主に、道元の時間論が展開されている『正法眼蔵』諸巻の本文の確定作業と註釈作業とを行い、それを通じて、時間論を中心とした道元の思想構造の概観について、大まかな見通しをたてることをめざす。また、日本倫理思想史、東アジア仏教史上における道元の存在論の意義の解明のための見通し、比較思想的研究のための見通しをたてる。

本年度の課題は、以下の通りである。

①疑問点の多い『正法眼蔵』本文の、校訂、諸異本の校合を上記の「仏性」巻、「現成公案」巻、「大悟」巻、「空華」巻等について行う。そのために必要な資料を調査収集する。特に、諸写本についても調査する。

②道元が『正法眼蔵』執筆の際に（特に上記諸巻を重点的に）、参照したと推定される中国禅の典籍を調査収集する。これは量的に膨大であり、そのなかには、翻刻、公刊されていない入手困難なもの含まれており、これについては、各地の禅宗系寺院、仏教系大学等、関係諸機関を調査する必要がある。

③以上の文献的な手続きを踏まえた上で、上記諸巻について、全文の註釈を行う。その際、従来解しがたいとされ、十分に解釈されてこなかった難読箇所については、『正法眼蔵』全巻の用例を参照しながら解釈を行う。また、文体の特異性について、思想背景を考慮して解明し、さらに、難読箇所については、いくつかの文の運びの類型化が可能であることが、これまでのわれわれの研究から予想されるので、類型ごとに解釈を検討することで、道元の読解の精度を高めることが可能となる。

④①～③の校訂、註釈、解釈作業に基づき、基づき道元の存在論の思想的構造を解明する。そこで明らかにされた道元の存在論を軸として、道元の思想構造を、従来の研究で解明された行為論、時間論、さらには、言語論、真理論などと有機的に関連させつつ総合的に検討する。

⑤①～④の註釈とそれに基づいた思想構造の解明を前提として、日本思想史、東アジア仏教史における道元の思想、特に存在論の意義について検討するために、今後のどのような方向性において研究をすすめていくべきかの見通しをたてる。

⑥①～④の註釈とそれに基づいた思想構造の解明を前提として、比較思想的観点から、道元の存在論について検討するための見通しをたてる。

平成１９年度

本年度は、初年度に行った①～④のテキスト内在的な研究を遂行するとともに、⑤で準備作業を行ってきた、道元の思想の、日本倫理思想史、東アジア仏教思想史における位置と意義の解明という観点から、道元の存在論の日本倫理思想史、東アジア仏教思想史におけ

る意義を本格的に検討する。この試みについては、テキスト外在的な解釈というよりも、テキストそれ自身がおかれた時代的、思想史的なコンテキストを読み解く試みであり、テキスト内在的な読みとの連関のもとにおいてのみ、意味をもつようなものとして理解されたい。
さらに、⑥で準備作業を行ってきた、道元の存在論の比較思想的研究についても本格的に着手する。
平成２０年度
本年度は、これまでの研究①～⑥を継続するとともに、研究成果について報告書を刊行する。

４．研究成果

(1)道元に関する新たな知見

①道元の仏性観についての研究

道元には、中国禅宗における「仏性」理解が仏性の有無に関する問題に矮小化され、問題の本質が正しく捉えられていないことに対する鋭い批判があった。そこで、道元は、大乗仏教の存在論の核心に位置する「空―縁起」に基づいて「仏性」の先行解釈を覆す。(道元にとっては、この「覆し」こそが「空」の表現であり、それによって「空そのもの」が顕現すると捉えられた。)

道元にとって、仏性とは、存在者の中に入っているかいないか、有るのか無いのかということで問題とされるべきものではない。そのような捉え方では、存在者と仏性とは、それぞれ別箇のものになってしまう。仏性は、存在の全体に関わらせて理解すべきだというのが、道元の主張である。

通常、仏性とは、個々の衆生という容器の中に入っている何らかの物体（たとえば種子）などとされるが、道元は、仏性を、個々の存在者の中に生じた「破れ目」と捉える。その「破れ目」は、動的場たる「空―縁起」の次元へとつながっており、その「破れ目」ゆえに、個々の存在者は、自己完結しきることも、実体化された固定的存在者となることもできないのである。

②道元の「悪」観の研究

道元の「悪」についての考え方を、大乗仏教の最も高度な罪障観である「罪障空」の観点から検討して、いわゆる世俗的善悪観を超え空思想に立脚した道元の特徴的な善悪観を提示した。

特に『正法眼蔵随聞記』の南泉斬猫の話について注目し、道元が、ある場合、つまり、真理を求めつつそれと一等である修行をわが身に表している限りにおいては、殺生が罪相でありつつも、同時に仏行であり得るとしていることの意味を解明した。

(２)道元と親鸞との比較思想的研究

①仏性をめぐる比較

道元と親鸞といえば、一般には、それぞれ、日本曹洞宗、浄土真宗の開祖として仰がれ、禅思想、浄土思想という別々のカテゴリーにおいて、その思想内容が検討されてきた。本研究では親鸞と道元の思想が、インド、中国、日本と大きな展開を遂げた大乗仏教の思想史の中でどのような意義を持つのかという点に着目して研究をおこなった。従来、宗学中心に個々の仏教者に焦点をあてるかたちで行われてきた仏教思想研究においては、このようなより広い視野からの研究はほとんど行われておらず、この点に、まず本研究の意味があるといえる。
本研究においては、道元と親鸞の仏性観をそれぞれ『正法眼蔵』『正法眼蔵随聞記』や『教行信証』『唯信抄文意』『歎異抄』などを通じて解明し、それらが共通の構造をもっていることを指摘した。そしてその共通性は、同じ問題意識を持つ故であることを解明した。共通の問題意識とは、インドから東アジアへという大乗仏教の展開の中で、仏性思想が著しく矮小化されて本来の意義を失っているということである。本研究においては、その矮小化の具体的ありようを、漢訳『仏性論』とサンスクリット原典『宝性論』の三義との比較を通じて明らかにした。『宝性論』における「如来蔵」の説明では、『仏性論』の言うところの「能蔵」の面は強調されていないということである。つまり、インドから中国へという仏性思想の伝播の過程で、仏性は空なる場から内在するものとして物象化されて捉えられたのである。道元も親鸞もこのような傾向に対するアンティテーゼとして自らの仏性思想を展開した。
彼らは、それぞれその思想背景は異なっているが、ともに大乗仏教をその真髄において捉えていた点では共通している。彼らは、実体化され内在的なものとして捉えられ、その有無というようなところに関心が矮小化されがちであった「仏性」を、もう一度、その本来である「空―縁起」の文脈に置き直して理解したのである。

②悪をめぐる比較

道元と親鸞とが悪の理解において共通性をもっていることを明らかにした上で、それらがともに、大乗仏教存在論である「空―縁起」に基づくものであることを指摘した。さらに、それは善と悪とが無化されるという局面を有するが故に、それに対する誤解から異端が両者の教団において発生したことを明らかにした。
道元は、修証一等であるところの修行をわが身に体現している限りにおいては、あらゆる行為は善であると説いた。
それに対して、親鸞は、殺生という行為は、宿業のしからしむところであり、絶対的な意味では善でも悪でもないと考えた。
このように、両者の主張は、善悪がつねに相

対的なものでしかない日常的な倫理の世界を超越したところ、すなわち宗教的絶対的世界においてはじめて成立するものである（このことを見落とすと両者における異端説のような誤解が生じる）。およそ、道徳・倫理上の善悪にせよ、宗教上の善悪にせよ、それが、真に透徹した吟味にさらされるならば、われわれの日常的な意味における善悪は、そして、自明のものとして受け入れられている、善と悪との、すなわち、価値と反価値の位階秩序は、いったんは、その存立の基盤を疑問にふされ、崩されなければならない。そのようなところで成り立つ善悪をこそ、親鸞も道元も問題にしていたのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２０件）

①頼住光子「仏教における「食」」
（『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書　学内教育事業編』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　2009 年 3 月 31 日　pp.301-309 査読無）

②頼住光子「道元の思想―その無常観をめぐって―」
（『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書　海外教育派遣事業編』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　2009 年 3 月 31 日 pp.209-214　査読無）

③頼住光子「「悪」の宗教的意義に関する一考察―親鸞と道元をめぐる比較思想的探求」
（『人文科学研究』第 5 巻 2009 年 3 月 30 日 pp.41-53　査読有）

④頼住光子「道元の思想について―『正法眼蔵』をてがかりとして―」
（『仏教文化』第 48 巻　東京大学仏教青年会 2009 年 3 月 20 日 pp.41-53　依頼原稿）

⑤頼住光子「親鸞と道元―その「悪」の理解をめぐって」（「アンジャリ」16 号　親鸞仏教センター　2008 年 12 月、依頼原稿）

⑥頼住光子「仏教における心の教育」
（尾田幸雄監修『日本人の心の教育』官公庁文献研究会、2008 年 5 月 2 日 pp.137-177、依頼原稿）

⑦頼住光子「中国禅宗の因果観に関する一考察――「罪性空」をてがかりとして」
（『人文科学研究』第 4 巻　お茶の水女子大学　2008 年 3 月　pp.1-13、査読有）

⑧頼住光子「仏教と倫理―日本仏教をてがかりとして」
（『地球システム・倫理学会会報』第２号 地球システム・倫理学会、2007 年 12 月 18 日　pp.114-119、査読無）

⑨頼住光子「道元の仏性論――「仏性」思想展開の観点から」
（『日本仏教綜合研究』第５号　日本仏教総合研究学会、2007 年 3 月、pp.287-292、依頼原稿）

⑩頼住光子「日本仏教における「徳」をめぐって」
（黒住真編著『思想の身体　徳の巻』春秋社　平成 19 年 3 月 15 日　pp.127-160、依頼原稿）

⑪Mistuko YORIZUMI　“Ethics and Language in Japanese Mahayana Buddhism”
（魅力ある大学院イニシアティブ『＜対話＞と＜深化＞の次世代女性リーダーの育成』平成 18 年度活動報告書シンポジウム編 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 2007 年 3 月 10 日　pp.51-53、査読無）

⑫頼住光子「親鸞の「仏性」思想について――その源流と展開」
（『人文科学研究』第 3 巻　お茶の水女子大学　平成 19 年 3 月　pp.1-13、査読有）

⑬頼住光子「道元の思想構造」
（魅力ある大学院イニシアティブ『＜対話＞と＜深化＞の次世代女性リーダーの育成』平成 17 年度活動報告書シンポジウム編 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 2006 年 11 月 1 日　pp.128-32、フランス語訳“La Structure de la Pensée de Dogen” pp.287-291、査読無）

⑭高島元洋「神道における「食」」
（『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書　学内教育事業編』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　2009 年 3 月 31 日　pp. 310-315 査読無）

⑮高島元洋「日本儒教の特徴」
（『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書　海外教育派遣事業編』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　2009 年 3 月 31 日 pp.187-204　査読無）

⑯高島元洋「庶民社会における心の教育」
（尾田幸雄監修『日本人の心の教育』官公庁文献研究会、2008 年 5 月 2 日 pp.215-241、依頼原稿）

⑰　TAKASHIMA　Motohiro”Buddha［仏butu:existence］（The perceptible world・Buddha-nature［仏性bussho:essence］（The imperceptible world）and Buddha in sitting meditation［仏向上 bukkojo」（さとり satori:The enlightenment）－ On the spiritual constitution of Dogen－
（『倫理学年報』57　日本倫理学会 pp.8-9.2008 年 3 月）

⑱高島元洋「仏（感覚可能な世界）・ 仏性（感覚不可能な世界）と仏向上（さとり）―道元の意識構造について」
（『倫理学年報』56 日本倫理学会 pp.259-268.2007年3月）

⑲高島元洋「近世日本の合理主義」（ *Le rationalisme dans le Japon pré-moderne Tradui par Matthias HAYEK* ）
（魅力ある大学院イニシアティブ『＜対話＞と＜深化＞の次世代女性リーダーの育成』平成 18 年度活動報告書シンポジウム編　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　2007 年 3 月 10 日　pp.227-233、pp.234-241[フランス語訳]、査読無）

⑳高島元洋「日本思想の可能性について―倫理学と倫理思想史」（*Les potentialités de la pensée japonaise： éthique et histoire de la morale Tradui par Julien FAURY*）
（魅力ある大学院イニシアティブ『＜対話＞と＜深化＞の次世代女性リーダーの育成』平成 17 年度活動報告書シンポジウム編 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 2006 年 11 月 1 日　pp.122-127 、pp.279-286[フランス語訳]、査読無）

〔学会発表〕（計２件）

①頼住光子「道元の仏性論について」
（日本仏教総合研究学会第5回大会発表、2006年12月10日　早稲田大学、東京）

②頼住光子「仏教と倫理――日本仏教をてがかりとして」
（日本倫理学会第 57 回大会ワークショップ「宗教教育と倫理」における提題、2006年10月13日　東京大学、東京）

〔その他〕

（講演等）

①頼住光子「仏教における「食」」
（第三回国際日本学コンソーシアムは：全体テーマ「食・もてなし・家族」日本思想部会発表、2008年12月17日、お茶の水女子大学、東京）

②頼住光子「仏教における「食」」
（第三回国際日本学コンソーシアムは：全体テーマ「食・もてなし・家族」日本思想部会発表、2008年12月17日、お茶の水女子大学、東京）

③頼住光子「道元の思想―その無常観をめぐって―」
（台湾国立政治大学との共同ゼミ発表、2008年12月13日、国立政治大学、台北）

④頼住光子「道元にける善と悪」
（公共哲学京都フォーラム発表　2008年3月22日　リーガロイヤルホテル、京都）

⑤頼住光子「道元の思想について―『正法眼蔵』をてがかりとして」
（東京大学仏教青年会講演、2007年11月9日、東京大学仏教青年会、東京）

⑥Mistuko YORIZUMI　“Ethics and Language in Japanese Mahayana Buddhism”
（「魅力ある大学院教育イニシアティヴ」によるシンポジウム「哲学、倫理、宗教思想―日本とフランス：交差する視点」〔共催：お茶の水女子大学比較日本学研究センター、ブレーズ・パスカル大学哲学科、哲学・合理性研究センター〕、お茶の水女子大学、2006年12月9日　東京）

⑦頼住光子「宗教教育と日本の伝統文化」
（「日本の国公立学校における宗教教育研究会発表」　2006年11月26日　国立女性教育会館　埼玉県武蔵嵐山）

⑧頼住光子「自力と他力の間――自己と他力・その連続と非連続」
（第70回公共哲学京都フォーラム「『おのずから』と『みずから』のあわい―日本思想の動性―」講演、2006年10月27日　学士会館本郷分館、東京）

⑨頼住光子「仏教の人間観――日本仏教をてがかりとして」
（聖心女子大学キリスト教文化研究所講演、2006年10月19日　聖心女子大学）

（書評）

⑩頼住光子：千歳栄『山のかたちをした魂』
（『地球システム･倫理学会会報』第２号、2007年12月1日　pp.146-149）

⑪頼住光子：小林道憲『文明の交流史観――日本文明の中の世界文明』
（『地球システム･倫理学会会報』第 1 号、2006年12月1日　pp.73-76）

⑫頼住光子：島薗進『スピリチュアリティの興隆――新霊性文化とその周辺』
（『地球システム･倫理学会会報』第２号、2007年12月1日　pp.126-129）

（解説）

⑬頼住光子「「空」の真理　道元の「開悟成道」―師・如浄との出会い―」
（井上ひさし『道元の冒険』上演パンフレット解説 10~11 頁。　2008年7月7日～28日　bunkamura シアターコクーン、東京公演。2008年8月3日～10日シアターBRAVA！、大阪公演。）

６．研究組織

(1)研究代表者
頼住光子（YORIZUMI　Mitsuko）
お茶の水女子大学大学院准教授
研究者番号：９０２１２３１５

(2)研究分担者
高島元洋（TAKASHIMA　Motohiro）
お茶の水女子大学大学院教授
研究者番号：９０１２７７７０

(3)連携研究者
該当なし